**タイトル：12 ポイント、強調(太字)、センタリング**

**執筆者名**

**所属機関名**

**１．はじめに**

　今回のシンポジウムは「フィリピン英語の諸相」というテーマである。ところで、「フィリピン英語とは何か？」と改めて問い直すと、長年フィリピン英語を研究してきた者でさえ、答えに窮することがある。フィリピン英語はその多面性、多様性が特徴である。とうてい一言で語れるものではない。しかし、今回のシンポジウムは発題者たちが、この難問に立ち向かおうとするものである。

　現在のフィリピンでは、英語は生きた言語である。人々はマスコミを通して、あるいは学校や官公庁などで、英語に接する機会はきわめて多い。フィリピン英語は、日々成長変化して、新しい語句、言い回しがつねに誕生していると言っても過言ではない。マニラだけでも、たくさんの英語による新聞が発行されている。そのニュース、エッセイ、広告などを見るだけでもフィリピン英語の多面性、多様性を知ることができるだろう。

**２．フィリピンの言語事情**

　フィリピンには、700以上の島があり、7000万人ほどのフィリピン人がいて、100以上の言語が話されている。各地の英語も、地方語の影響を受けており、それぞれが異なる。フィリピンは社会階層の差も激しいので、ネイティブ並みの英語を駆使する人から、小学校を中退した、スラムの子供たちの用いる英語もある。教育程度により話す英語の流暢さが異なる。社会階層により、フィリピンの英語は、いわゆる高層語(acrolect), 中層語(mesolect), 基層語(basilect)と分かれてくるのである。あるいは職業により、英語が異なる。学校の教員、一般事務職、物売り、タクシーの運転手、彼らの使う英語はそれぞれの特徴を示している。これら多様なフィリピン英語はそれぞれの奥行きもかなり深い。

　日本においては、フィリピン英語の研究者はまだまだ少なくて、研究の歴史も浅い。先行研究の蓄積も少なくて、今まで学会の発表も多くはなかった。フィリピン英語に関する散発的な発表はあったが、シンポジウムという形で、フィリピン英語を討議するのは今回がはじめてではないだろうか？その意味で、ちょっと大げさに言えば、この大会は日本におけるフィリピン英語研究史上、重要な出来事、epoch-makingな大会であると自負している。本来ならば、何十人という研究者が論を尽くしてはじめてフィリピン英語の諸相がおぼろげながら見えてくるのであるが、少なくとも5名の研究者がつどい、その専門に研究してきた視点から語ることはきわめて有意義なことである。このシンポジウムをフィリピン英語研究史の、ささやかであるが大きなfirst stepにしてみたい。

**３. フィリピン教育訪問**

　これまで，英語教師対象フィリピンツアーを実施した。実施年度と参加者、テーマは以下のとおり。

・1998年３月，参加者：６名（高３，大３），テーマ：学校教育

・1999年１月，参加者：７名（中２，大３，NGO職員1, 学生１），テーマ：開発，労働問題

・2001年８月，参加者：８名（中３，高３，大２），テーマ：先住民族の人権，授業交流

　この企画のねらいはつぎのようなものであった。

・フィリピンの歴史，社会的現実を知り，課題を認識する。

・英語の多様性（フィリピン英語）を知る。

・フィリピンで英語が使われているということを経験し，実際にコミュニケーションを図る。

・ポピュラーエデュケーションの学習方法を体験する。

・フィリピンでの経験を教育や授業にいかす。

**４. 成果と課題**

　参加者の関心によって訪問先を決めるようにしてきたことは，よい点でもあるが，継続性に欠ける。PEPEというカウンターパートは持っているものの活動対象地域があるわけではないので，継続的な関与を現地とできているわけではない。しかし，回をかさねるなかで関係もできている学校もあり，第４回のツアーの学校訪問では，こちら側が用意をしたワークショップを高校生を相手に実施するという試みもした。

**参考文献**

外国人雇用状況報告 http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/11/h1128-1.html

石川県統計情報　http://toukei.pref.ishikawa.jp/

県民文化局国際課　2002年　『石川県の国際化の現況』

岸野努　2003年　「北陸をセールスするのは誰か」（北陸中日新聞、2003年11月11日）

「ほっと石川旅ネット」（石川県観光推進総室）http://www.hot-ishikawa.jp/

野町小学校日本語教室http://www.kanazawa-city.ed.jp/nomachi-e/